

聖徳太子一四〇〇年御遠忌の今日に  
先代旧事本紀大成経を学ぶということ

西暦二千二十一年は聖徳太子の千四百年忌に当たる。太子ゆかりの仏教寺院で盛大な記念行事が予定され、聖徳太子の御名を格別に見聞きする年になる：かと思っていたが、昨年からのコロナ感染症防止策の影響で関連行事は延期、縮小で予想に反して静かである。今まだ三月なのでこれからではあるけれども、僧侶以外の一般信者の参詣は控えめにならざるを得ない。普段はともかく今年はという方も、三密を避けよという通達は守らねばならないだろう。

この場合の三密は一つ空間に皆で集まることを指し都合で作られた言葉だが、仏教本来の三密は密教における修行の基本を指し、身・口・意の三つの一体化をいうもの

である。僧侶は「三密を避けて」に苦笑いかもしれない。

世間世俗との境界が消え、俗と僧侶の区別もまたあるかなしかわからない現状ではあるけれども、密という字は仏教においては深い意味を持つ。ただし真言密教に限ったのことといわれるかもしれないがそうではない。仏の道は釈迦の教えであり、何に重きを置いているかで各宗派に分かれても大義として悟りの極意は同じで、身口意を揃って整えるのは当然である。信者（一般衆生）に強いて求めないだけで、悟りを目指すのが本分の僧侶には基本のキといえるだろう。

加えて言えば神の道における靈宗の修養も三密と同じである。学とは何かという一文には、師の教えを聞き、また読み書きで得、その知識を行いによって深め、実感として身に修め、心を格せよとある。聞く、

問う、行うのどれが欠けても学び足らず、  
学びは神の心と心身一体で一つになる。そ  
うして靈しきを修得する。

七世紀前半、聖徳太子は大成経というお  
しえぶみをわが国の未来、後世のために編  
まれたのだが、なかでも経教本紀の巻は後  
世のみならず当時の政治に必須の学であり  
教育と人材育成に不可欠のことであった。  
時の推古天皇は率先して学ばれ、太子を後  
押しされた。その言葉は直接には朝廷の臣  
下、公卿たちへ向けられ、そこからさらに  
全国の国司へ伝達されていた。

国政の基盤となる五憲法でわかるように  
政治、儒学、僧侶、神官の各々は、民が平  
穩に生活するためにはたらく司であり、導  
く立場の者としての自覚、あるべきようを  
求められた。それ以外の実学として医療、  
土木治水、商業流通（市を立て道路を造る）  
などに適宜、人を選び指示されている。

何びとも知識だけでなく五徳が求められ、  
守るべき法が説かれた。

このことが民主主義のいま、どう役に立  
つかという問いに答えるのは容易である。  
太子は冠位十二階の制を新たに定め、古来  
の家柄と世襲によった役職を、個人の徳と  
功で測る成果、能力による任命へと改めた。  
この改革により生れながらの身分に縛られ  
ることなく能力次第、努力しだいで人生を  
切り開く可能性が拓かれた。当時、最先端  
の知識を授けられた高級官僚も人の子にか  
わりない。一個の人としてどう生きるべき  
か、はたらくべきかが問われたのだ。太子  
は常に平等に厳格である。  
この教えは千年後も二千年後も国家の体  
勢が変わろうとも、人の世である以上、天  
地のなかにいる以上、変わるものではない。  
道を求める者にとっては何よりも尊い教  
えであるだろう。御遠忌に改めて思う。